

ジャックと豆の木

楠山正雄

青空文庫

むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことでございます。ロンドンの都からとおくはなれたいなかのこやに、やもめの女のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくくらししていました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、なまけものでしたが、ほんとうは氣だてのやさしい子でしたから、母親は、あけてもくれども、ジャック、ジャックといって、それこそ目の中にでも入れてしまいたいくらいにかわいがって、なんにもしごとはさせず、

ただ遊ばせておきました。

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人、どういうものか運がわるくて、年年ものが足りたなくなるばかり、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類いるいまで売って、手に入れたおかねも、手内職てないしよくなんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかっててしまって、とうとう、うちの中で、どうにかおかねになるものといっつては、たった一ぴきのこめうしった牝牛めうしだけになっつてしまいました。

そこで、ある日、母親は、ジャックをよんで、

「ほんとうに、おかあさんは、自分のからだを半分もって行かれるほどつらいけれど、いよいよ、あの牝牛を、手ばなさなければ

ならないことになったのだよ。おまえ、ごくろうだけれど、市場いちばまで牛をつれて行って、いいひとをみつけて、なるたけたかく売って来ておくれな。」といました。

そこで、ジャックは、牛をひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、むこうから、肉屋の親方がやって来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい。」と、親方は声をかけました。

「売りに行くんだよ。」と、ジャックはこたえました。

「ふうん。」と、親方はいいながら、片手にもった帽子をふつてみせました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックが、

帽子のなかを、ふとのぞいてみますと、きみのような形をした豆が、袋の中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」

そうジャックはおもって、なんだか、むやみとそれがほしくなりました。そのようすを、相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりないこどもを、うまくひっかけて、やろうとおもって、わざと袋の口をあけてみせて、

「坊や、これがほしいんだろう。」^{ぼう}といいました。

ジャックは、そういわれて、大にこにこになると、親方はもつたいらしく首をふって、「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆さ。どうして、ただではあげられない。どうだ、そ

の牝牛と、とりかえっこしようかね。」といいました。

ジャックは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、おたがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほくほくしながら、わかれしました。

ジャックは、豆の袋をかかえて、うちまでとんでかえりました。うちへはいるか、はいらないに、ジャックは、

「おかあさん、きょうはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういって、だいとくいで、牛と豆のとりかえっこした話をしました。ところが、母親は、それをきいてよろこぶどころか、あべこべにひどくしかりました。

「まあ、なんと**い**うばかなことをしてくれたのだね。ほんとにあ

きれてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいじな牝牛一ぴき、もとも子もなくしてしまふなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうしましょう。」

母親はぶんぶんおこつて、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしまいました。そして、つくづくなさけなさそうに、しくんしくん、泣きだしました。

きつとよろこんでもらえるところとおもっていると、あべこべに、うまれてはじめて、おかあさんのこんなにおこつた顔をみたので、ジャックはびっくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩はやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があげたのに、なんだかくらいなとおもつて、ふと窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子たねから、芽が生えて、ひと晩のうち、ふとい、じょうぶそうな豆の大木が、みあげるほどたかくのびて、それこそ庭いっぱい、うっそうとしげつているではありませんか。

びっくりしてとびおきて、すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといって、豆の木は、それこそほうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあつて、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにかみえなくなってしまうました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわるくなりました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あんまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたころ、やっとてっぺんにのぼりつ

きました。

二

ジャックは、そのとき、まずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさいている草原もありました。水すいしょう晶のよ
うにきれいな水のながれている川もありました。こんなたかい空
の上に、こんなきれいな国があるとは、おもってもいませんで
したから、ジャックはあつけにとられて、ただきよんとしてい
ました。

いつもまにか、ふと、赤い角かくずきんをかぶった、みような顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前にあらわれました。ジャックは、ふしぎそうに、このみような顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声でいいました。

「そんなにびつくりしないでもいいのだよ。わたしはいつたい、お前さんたち一家いっかのものを守ってあげている妖ようじよ女によのだけれど、この五、六年のあいだというものは、わるい魔まもののために、魔法ほうまでしばられていて、お前さんたちをたすけてあげることができなかつたのさ。だが、こんどやつと魔法がとけたから、これからはおもいのままに、助たすけてあげられるだろうよ。」

だしぬけに、こんなことをいわれて、ジャックは、なおさらあつけにとられてしまいました。そのぽかんとした顔を、妖女はおもしろそうにながめながら、そのわけをくわしく話しました。それをかいつまんでいうと、まあこんなものでした。

「ここからそうとおくはない所に、おそろしい鬼の大男が、すみかにしている、お城のような家がある。じつはその鬼が、むかし、そのお城に住んでいたお前のおとうさんをころして、城といつしよに、そのもっていたおたからのこらずとってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏びんぼうになってしまったのさ。そうしてお前も、赤ちゃんのときから、かわいそうに、お前のおかあさんのふところにだかれたまま、下界げかいにおちぶれて、なさけない

くらしをするようになったのだよ。だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」

こういうふうにいよいよきかされると、ぐうたらなジャックのころも、ぴんと張^はつてきました。知らないおとうさんのことが、なつかしくなつて、どうしてもこの鬼をこらしめて、かすめられたからを、とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもつて、とてもいさましい気になつて、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいにわすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さつそく、鬼の住んでいるお城にむかつて、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にしずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上さんかみが出て来ました。きみのわるい顔に似合にあわず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうなようすをみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、「いけない、いけない。きのどくだけれど、とめてあげることはいできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかると、晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。ぼ

く、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、たのむように、ジャックはいいました。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、朝になつたら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゆう、にわかにならずしん、ずしん、地ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人の人くい鬼が、もう、そこからかえつて来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中にかくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならしながら、たれだつてびっくりしてふるえ上がるような大ごえで、

「フン、フン、フン、

イギリス人の香かがするぞ。

生きていようが死んでよが、

骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあるひとたちの、においでしよう。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくんくんやっていました。でも、どうしても、ジャックをみつ

けることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰こしをおろしました。そしてががつ、がぶがぶ、たべたりのんだりしはじめました。そつとジャックがのぞいてみますと、それはあとからあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たらふくたべてのんだあげく、お上さんに、

「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。

それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上にのせて、鬼が、

「生め。」といいますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。

鬼がまた、

「生め。」といいますと、またひとつ、金のたまごを生みました。
「やあ、ずいぶん、とくなにわとりだな。おとうさんのおたから
というのは、きつとこれにちがいない。」と、下からそつとなが
めながら、ジャツクはそうおもいました。

鬼はおもしろがつて、あとからあとから、いくつもいくつも、
金のたまごを生ましているうち、おなかのはつてねむたくなつた
とみえて、ぐすぐすと壁かべのうごくほどすごい大いびきを立てなが
ら、ぐつすりねこんでしまいました。

ジャツクは、鬼のすつかりねむつたのを見すまして、ちようど
鬼のお上さんが、台所へ行っているのをさいわい、そつとだんろ

の中からぬけだしました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どンドン、どンドン、かけだして行って、豆の木のはしごのかかっている所までくると、するするとつたわっており、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、むすこが、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していますと、ぶじでひよっこりかえって来たので、とても大きわぎしてよろこびました。それから、ジャックのもってかえった、金のたまごを生むにわとりのおかげで、おや子はお金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

しばらくすると、ジャックはまた、もういちど空の上のお城に行つてみたくなりました。そこで、こんどは、すっかり先せんとちがったふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼつて行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそうに、とめてもらいたいといつて、たのみますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふつて、

「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよつくらも

って行かれた。それからはい晩、そのことをいいだして、わたしが、しかられどおし、しかられているじゃないか。またもあんなひどいめにあうのはこりこりだよ。」といいました。

それでも、ジャックは、しつっこくたのんで、とうとう中へ入れてもらいました。するうち、大男がかえつて来て、また、そこらをくくんかいでまわりましたが、ジャックは、あかがねの箱の中にかくれているので、どうしてもみつかりませんでした。

大男は、この前とおなじように、晩ばんの食事をたらふくやったあとで、こんどは、金のたまごをうむにわたりの代りに、金や銀のおたからのたくさんつまつた袋を出させて、それをぎあつとテールの上にあけて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじき

でもしてあそぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざんあそんでいましたが、ひととおりたのしむと、また袋の中にしまつて、ひもをかたくしめました。そして、天井にひびくほどの大あくび、ひとつして、それなりぐうぐう、大いびきでねてしまいました。

そこで、こんども、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはい出して、金と銀のおたからのいつぱいつまった袋を、両方の腕に、しっかりかかえるがはやいか、さっさとにげだして行きました。ところが、この袋の番人に、一ぴきの小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きやんきやん吠ほえだしました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大

男は、とても死んだようによくね入っていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゆうで、あとをもみずにどんどん、どんどん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。さて、にわとりとちがつて、こんどはおもたい金と銀の袋をはこぶのに、ほねがおれました。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがり、豆の木のはしごを、ジャックはおりました。

やっとこさ、うちまでたどりつくとおかあさんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になつて、戸をしめてねていました。それでも、ぶじなジャックの顔を見ると、まるで死んだ人が生きかえたようになって、それか

らずんずんよくなって、やがて、しやしんあるきだしました。その上、お金がたくさんできたときいて、よけいげんきになりました。

四

こうして、またしばらくの間、ジャックは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゅう、むずむずして来ました。もうまた天てんじょう上じょうしたくなつて、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になって、気がふさいで来ました。

そこで、ジャックは、ある日また、そつと豆の木のはしごをつたわつてのぼりました。こんども顔から姿から、すっかりほかのこどもになつて行きましたから、鬼のお上さんは、ただただまされ、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜かまのなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゆうかぎまわつて、ふん、ふん、人くさいぞといいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといつて、へやの中のもの、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもつて、ふるえていますと、それこそ妖女がまもつていてくれるのでしょ

うか、大男は、ふと気がかわって、それなりろばたにすわりこんで、

「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」といいました。さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、しかたがない、こん夜やはハープでもならすかな。」といいました。

ジャックが、そつとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかざった、みごとなハープのたてごとが目にはいりました。

鬼の大男は、ハープをテーブルの上にのせて、

「なりだせ。」といいました。

すると、ハープは、ひとりでになりだしました。しかもその音ね

のうつくしいことといったら、どんな楽器がっきだって、とてもこれだけの音にはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのにわとりよりも、金と銀とのいっぴいつまった袋よりも、もつともつと、このハープがほしくなりました。

するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたにして、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまいました。ジャックは、しめたとおもって、そつとお釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえてにげだしました。ところが、あいにく、このハープには、魔法がしかけてあつて、とたんに、大きな声で、

「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」と、どなりました。

これで、大男も目をさましました。むうんと立ち上がってみると、ちつぽけな小僧が、大きなハープを、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえました。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハープまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。

「つかまるならつかまえてみる。」

ジャツクは、まけずにどなりながら、それでもいつしようにけんめいかけました。大男も、お酒によった足をふみしめふみしめ、よたよたはしりました。そのあいだ、ハープは、たえず、からんからん、なりつづけました。

やっとこきと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハープにむかつて、

「もうやめろ。」といきますと、それなりハープはだまりました。ジャックは、ハープをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか目の下に、おかあさんが、こやの前に立つて、泣きはらした目で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。

「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいいつぱいよびました。

「それよか、斧おのをもってきておくれ。はやく、はやく。」

もう一分もまたれません。大男はみしり、みしり、はしごをつたわつて来ます。ジャツクは、気が気ではありません、身のかるいのをさいわいに、ハープをかかえたなり、はしごの途^{とちゆう}中、つばめのようにはやわざで、くるりとひっくりかえつて、たかい上からとびおりました。そこへおかあさんが、斧をもってかけつけたので、ジャツクは斧をふるつて、いきなり、はしごの根もとから、ぷつぷつ切りはなしました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ちてきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

ちようどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあって、道をおしえてくれた妖女が、こんどはまるでちがつて、目のさめるように美しい女の人の姿になって、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖を手にもっていました。杖のあたまには、純じゆん金きんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分がはからつてしたことだといって、

「あのととき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだ

なあとおもつてながめたなり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛めうしは、よし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」

と、こう妖女は、いいきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャックと豆の木

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>